

答辞

答辞に先立ちまして、昨年十二月にご逝去された有馬朗人学園長の御生前の御功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。常日頃から私達武蔵生に対し、武蔵学園建学の三理想を説いてくださった有馬先生のご期待やご希望の思いを胸に、卒業生を代表して、答辞を述べさせていただきます。

冬の寒さも和らぎ、日一日と暖かさを増す日差しに春の訪れを感じる季節となりました。桜の花が咲き誇り、あたたかな光に包まれたこの良き日に卒業式を迎えられたことを大変嬉しく思います。また、ご多忙の中、先生方並びにご来賓の皆さまに御臨席を賜り、卒業生一同、心より厚く御礼申し上げます。

四年前の二〇一七年四月、私たちは武蔵大学に入学しました。これから始まる新たなステージに心を躍らせつつも、期待と不安の入り混じった気持ちでこの大講堂に足を踏み入れた入学式がとても懐かしく感じられます。武蔵大学で過ごした四年間、今ここにいる卒業生の一人一人が、学業や課外活動を通して成長し、自分の進むべき道を見出し、力強く前へ歩んできたのではないのでしょうか。

ここ武蔵大学は、イギリスにあるロンドン大学の経済経営学士号を取得できるプログラムを日本で唯一提供している大学です。四年前、当時大学受験生であった私は、この通称 PDP と呼ばれるプログラムに大きな可能性を感じ、迷わず武蔵大学を進学先として選びました。入学してから僅か二か月後、私達 PDP 生はフィリピンのセブ島にいました。九月から始まるロンドン大学の授業に備えるための短期語学研修でした。約一ヶ月滞在した学校は、敷地の周りが高い塀で囲われており、夜九時になると誰も出入りできないというまるで監獄の様なシステムでした。異国の地で、壁の中でひたすら朝六時台から夜八時台まで授業を受け続けるという英語漬けの日々は、まだまだフレッシュだった私達一年生にとっては大変刺激的で貴重な経験となりました。

三年生の時には、武蔵大学が新たに協定を結んだイギリスの London School of Economics and Political Science、通称 LSE への留学第一号として送り出させていただきました。LSE は経済分野で世界トップ5に入る大学です。毎日授業についていくのに必死で、図書館や寮の部屋に缶詰めになっていました。意気揚々と乗り込んだ留学生活でしたが、言葉も通じず、前例もない孤独に過ごす日々には辛さを感じたこともありました。しかし、そんな中でもひたすら勉学に邁進することができたのは、入学当初から徹底した少人数教育のもとで培った武蔵大学での学びがあったからでした。経済学部生としては致命的と言えるほど数学が苦手だった私が、経済学という学問の中の数学の重要性に気が付き、そして世界的に有名な大学に留学するに至ったのは、どんなに小さな疑問でも決して蔑ろにせず、親身に向き合

い、一から丁寧に繰り返し教えてくださった教授の御指導のおかげであると感じています。

また、私は経済状況が厳しい中、大学に進学しました。本来であれば高校卒業後は働く必要がありましたが、どうしても勉強を諦めることができず、奨学金を借りて進学しました。先に述べたセブ島語学研修やLSE留学を経験する中で、ここ武蔵大学は、私のように経済的に厳しい状況にある学生に対しても、本人が覚悟を持って望みさえすれば、たくさんの学びのチャンスを与えてくださる大学であることを実感しました。この四年間、英語を通して経済学や経営学、会計学、数学、統計など様々な分野についての学びを積み上げてきましたが、思う存分勉強ができる環境に身を置くことができ、そして、熱意溢れる教授陣の下で学ぶことができ、本当に楽しく幸せな大学生活でした。来年の春には新学部が創設され、武蔵大学はまた一つ新たなステージに立つことと存じます。私は、単に学生に成長を求めるだけでなく、組織の環境自体も日々成長していくこのような素晴らしい大学の一員として学べたことをとても誇りに思っています。

最後になりますが、私達が充実した大学生活を送ることができたのは、真摯にご指導してくださった先生方、日々より良い学生生活のため尽力して下さった職員の皆様、共に学んできた友人達、そして愛情深く見守ってくれた家族のおかげです。この四年間、多大なるご支援をいただき、本当にありがとうございます。新型コロナウイルスの流行は世界ではまだまだ終息の兆しを見せていませんが、皆様のご多幸とご健康をお祈り申し上げるとともに、武蔵大学のさらなる発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

令和三年三月二十二日

武蔵大学 第六十九回卒業生代表
経済学部経済学科 渡戸佳乃